

---

# ハイテク無双！ 戦国の猛者たち

フレディ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

ハイテク無双！ 戦国の猛者たち

### 【Nコード】

N6035G

### 【作者名】

フレディ

### 【あらすじ】

世は戦国……ではなくて平成。戦国の猛者たちは、なにかあったのか平成の世にやってきてしまった。だが彼らは進んだ技術を使いこなし、ハイテクを駆使して天下を狙う。

## 第1話：世は平成

世は戦国……の、はずだった。

諸国の戦国大名たちは、皆自分の天下を目指して戦に明け暮れていた。

そんな中、世界に異変が起きた。一体なにが起きたのか、それは戦国大名にも兵士たちにも、田畑を耕す農民たちにも分からない。ただ世界を光が包み込み、ある者が気がつけば周りには見たことのない大きな建物。  
またある者は、異様な建物の中にいた。

世は平成……この遙かに技術の進んだこの世界で、戦国の猛者たちはハイテクを駆使して己の天下を目指すのだった。

2

「信長様！ これは一体……」

「光秀……お前はなにを慌てている？ 我は魔王。なに  
も慌てることはない、この世がどうなるかと我の天下は揺るがん……」

「はっ！ 兵士にもそうお伝えします！」

彼らは織田信長と明智光秀。

信長は戦国の世でも魔王と恐れられ、光秀はその片腕としてその名を轟かせ、天下に最も近いとまで言われる猛者たちだ。

彼らは星条旗のはためく国、アメリカ合衆国にやってきていた。そして彼ら2人は真っ白で大きな建物の中に、信長の手にはスイッチが持たれている。

もちろん彼らはまだ、そのスイッチの正体など知らない……

「わはは！ …… 凄いな ……」

最も大きな面積をもつ国、ロシア連邦。

その国に武田信玄はいた。彼は笑い続けた。おそらく誰よりも早くこの世界の技術と言うものに触れ、理解したのは彼だろう。

だからこそ笑っていた。天下を我が物とするであろう自分のことを考えて笑い続けていた。

「わしは …… 勝つぞ ……」

「親方様！ どうなさつた!？」

「あはは …… 幸村！ わしは笑いが止まらんぞ！ この戦 …… もう勝ちは見えている」

「おお …… 頼もしきお言葉！」

「ガアッハッハッハ！」

そして、日の丸の国旗のはためく国日本。

この国にもまた、戦国の猛者が1人いた。その名を浅井長政。

彼の考えていることは、戦国からこの平成に世の中が変わったところで変わることは無い。

「信長……貴様もこの世界にいるのであろう。必ずこの浅井長政が滅ぼしてやる……」

「兄上様を……殺すの？」

浅井長政には、守ると決めた人がいた。

その女性の名を市といい、市は浅井長政の宿敵、魔王信長の実の妹だ。

「……魔王は必ず倒す！ 必ずだ！」

「……はい」

市は少し前までは兄である信長を信じていた。

だが今は違う。信長は間違っていると知っている。だからこそ市は決めたのだ。

”長政について行く”と……

「信玄……お前もこの世界にいるのか……？」

ユーラシア大陸の大国の一つ中国。そこにも戦国の猛者はいた。

その者は、武田信玄の好敵手にして、毘沙門天の生まれ変わりとも言われる戦国最強の武将。

その名を上杉謙信。

「必ずや……決着はつける」

「ふう……あなたはドッシリ構えてればいい。謙信様が負けることは無い」

直江景綱。

上杉謙信に仕える家臣で、謙信をも上回りかねない能力は、謙信から最も信頼されている。

だが景綱は知っている。謙信は負けないことを。

だからこそ彼は謙信に仕えている。優秀な彼はそれこそが最善であること理解しているから。

織田信長が出現し、その支配を広げたアメリカ合衆国。

そこから最も近い大国カナダ。そこには別の戦国の猛者が現れ、支配を広げていた。

しかし彼らは国境など知らない。支配を広げる上で剣を交えることになるのは必然だった。

魔王信長のすぐ隣にいる。独眼流、伊達政宗。

「……………信長の軍勢が。そうかご苦労」

彼は兵器の扱いには長けていた。未知の武器である現代の兵器をこれほど早く使いこなし、現代の軍隊にも引けをとらない軍勢をつくり上げたのは、おそらく彼だけであろう。

そして、それをすぐ横でサポートした名軍師、片倉景綱。

彼と伊達政宗がいたからこそ、これほど早くこの軍勢は完成したといえる。

「しかし正宗。こちらの手勢は充分ある。勝機はあるはずだ。だが敵はあの魔王信長。常識は通らないだろう……………」

「ふつ……………魔王か。だが俺は奴が魔王だと思ったことは無い。こんな世になったのだからなお更だ」

「お前らしい。なら魔王気取りの凡人に、格の違いを分からせてやるか？」

「ポつと出の素人が、俺たちに勝とうだなんて百年早い！ 景綱！ 全軍出せ！ 策はお前に任せる！」

独眼流、伊達政宗は動き出した。

槍と剣、火縄銃ではない。ミサイルにマシンガンに手榴弾。鎧兜ではなく最先端の軍服に身を包んだ伊達の軍勢は、一直線に織田信長のいるホワイトハウスに向かう。

伊達政宗、片倉景綱はその光景を戦闘機の中、空から満足そうに眺めていた。

「いくら魔王とはいえ……この早さ。この戦力を前には対応はできないでしょう」

「はっ！ 信長ごとき、最初から問題ではない……」

2人は戦闘機でホワイトハウスに向かう。

もちろん自分たちの勝利しか見えてはいない。

場面はホワイトハウスに移る。

信長は大きなソファーにもたれて寛いでいた。

そんな信長に、忍のものから連絡が入った。

「ご報告を！ レーダーに何かが！」

「もう来たのか！ がはは！ 魔王を恐れぬ愚か者が。我が信長と知っての攻撃か？」

「分かりません！　しかし地上には伊達の軍勢が！」  
「独眼流か……まあい。奴のように身の程を知らん奴は困る……」

信長はソファーから立ち上がり、ホワイトハウスを後にした。

そして彼が向かったのは、広いアスファルトの地面が広がる現代の空港。

そこには地上から上空の飛行物体を打ち落とすことを目的としたミサイル兵器が大量に並べられてた。

「くくく……我の力を知れ。独眼流よ」

信長が右手を上げた。

それを合図にミサイルの発射台に待機していた織田軍の兵士たちが一気にミサイルの発射のスイッチを押した。

彼らはミサイルがなんなのか知らないが、魔王は全て理解していた。

それが一発で戦闘機の一機位、楽に落とせることも理解している。

だが彼は合計250の弾道ミサイルを飛ばした。

「ふふふ……ふあっはっはっは！！　死ねえ！　独眼流よー！」

織田信長の、過激な1発……250発で、織田の軍勢と伊達の軍勢の戦いが始まった。

## 第2話：魔王信長

「織田の軍勢と我らの軍勢が衝突するまであと3分といったところでしょうか」

「ふん。俺達の勝利は決まっている」

伊達政宗を乗せた戦闘機は、片倉景綱により操縦されていた。

上空から地上を眺めて余裕を保っていられるのも今のうち。彼らの目の前にはすでに魔王によって絶望が迫っていた。

「正宗！ ちょっと揺れるぞ！」

「なんだ？ なんか撃つてきた？」

「………ミサイルだ。それも凄い数………！」

「ああ！？ なんだコイツは！？」

目の前には、凄まじい数のミサイル。どうやっても交わしきるの  
は不可能な状況だった。

彼等が普通だったなら………

「針路を空ける！ 真っ直ぐ進め！！」

「行きますよ！」

戦闘機は一切スピードを緩めずに、方向も変えず一直線にミサイルの中へ突っ込んでいった。

そんな高速で飛ぶ戦闘機の窓を割って、伊達政宗は体を乗り出した。

「オラァ！ 喰らいやがれ！」

その手には、大きなロケットランチャーが片手に2つずつ、合計で4つのロケットランチャーが。その全てを同時に使い、戦闘機の針路に向けて弾丸を放った。

ロケットランチャーの弾は、何かにぶつかると爆風とともに、強い熱を出す。

そのロケットランチャーの弾同士をぶつけて、戦闘機の前方30メートル程の所に大爆発を起こした。

その爆風でミサイルは方向を変え、次々と地面に落ちていった。飛行区域の真下には、織田の軍勢がいた。

「さすがは正宗様だな……………」

「よせ景綱。正宗でいい」

戦闘機はさらにスピードを増し、ホワイトハウスの方に猛スピードで進んでいた。

「ご報告です！ どうやら飛行物体は墜落していませんよ！」

「そうか……………くく……………そうでなくてはな」

「は……………？ よろしいのですか？」

「何がだ？ ただこの魔王が自ら手を下す結果になったのみ……………」

……………来い独眼流。魔王の力見せようぞ！」

信長は、ホワイトハウスから出た。

そして空を見た。

そこには音を立てて飛ぶ、一機の戦闘機があった。

そしてその戦闘機を見上げる信長、そしてホワイトハウスに次々とロケットランチャーの弾が落とされた。

「ほうう……」

信長はこれを踊るように動きかわした。

そして戦闘機は一度通り過ぎ、旋回して角度を変えて信長に直接体当たりを仕掛けてきた。

「この程度……独眼流。がっかりだ」

500キロ近いスピードで飛ぶ戦闘機の軌道を、信長は足蹴りで変えた。

信長に無理やり軌道を変えられた戦闘機は、再離陸はできず、地面を滑っていき空港の建物に衝突し、爆発炎上した。

「何ががっかりだ？」

独眼流、伊達政宗は信長の足蹴りの瞬間に戦闘機の窓に開いていた大穴から飛び出して、信長のすぐ近くに着地していた。

その手には合計4本のロケットランチャー。

それを全て信長に向けて正宗は言った。

「俺の勝ちだぜ」

「……独眼流伊達政宗。それほどの闘志に実力を兼ね備え……我は非常に悲しい」

「あ？」

「それゆえに期を逃し、今魔王の前に朽ちることを……」

信長は機関銃を正宗に向けて言った。

「その武器は確かに威力は大きい。だがその弾が我にとどくのと・

「……高速で飛ぶこの弾が、貴様の命を奪い去ると、どちらが速いと思う？」

「期を逃してんのはテメエだぜ？　すぐに俺の命を奪うべきだったな……」

伊達政宗はロケットランチャーを構えた。

その巨大なロケットランチャー4つは、完全に正宗の体を隠した。だが、信長は一切退かずに機関銃を正宗に向けて乱射した。乱射といっても1発1発の精度は凄まじく、正宗の持つロケットランチャー全ての銃口を自分から逸らし、それでいて正宗の体を打ち抜く隙間を開けようとした。

信長の恐ろしく正確な乱射は、正宗のバランスを崩させ、足をロケットランチャーの陰から外させた。

その隙を信長が見逃すはずも無く、機関銃の弾は正宗の両足を打ち抜いた。

「イッテ……信長ア！！」

「数を撃てば当たるものでもない！」

正宗は、ロケットランチャーを構えなおし、信長に向けて一斉射撃した。

だがその弾は信長にはかすりもしない。

「独眼流伊達政宗。やはりこの程度……興醒めだ」

「待て！　何処に行く……？」

「心配するな、貴様は殺す」

信長は建物の中に歩いていった。

そしてミサイルの準備をしようとしたが、それが実行される前に、

伊達の軍勢がこの空港にたどりついた。

その数4500人。戦車に重火器もかなりの数がある。

「死ぬのは……魔王信長！ お前だ！」

伊達の軍勢による一斉射撃が始まった。

その威力は凄まじく、織田信長のいる建物の中の兵器、そしてその建物ごとをあっという間に倒壊させた。

「魔王も所詮は人だな……」

「そうは思いませんが」

「!!！」

伊達政宗のすぐ後ろには、織田信長の側近、明智光秀がやってきていた。

その手には武器という武器も無く、体も重装備で固めているわけでもない。

「余裕か……それとも諦めたか？ 明智光秀よ」

「どちらでも……私はあなたに忠告に来たのです」

「なに……?」

「だから言ったであろう？ 数を撃てば当たるものではないと」

その声の主は明智光秀ではない。倒壊した建物の中で、完全に倒したと伊達政宗は思っていた、魔王織田信長のものだ。

信長は巨大な戦闘機に乗っていた。

戦闘機からはしごが下ろされていて、光秀がそれに捕まると、信長は上空高くへと戦闘機で高度を上げていった。

「逃げるか……魔王信長！」

「逃げると言うか？ だから貴様は我には勝てん。考えてもみる、  
ここが我の拠点ならなぜ他の兵士がいない？」

「そういえばここにはほとんど兵士は……………」

「ま、まさか！！」

片倉景綱があることに気付いた。

だがそれは伊達軍の敗北を意味している。

「……………大将自ら囿か？」

「いえ……………おそらくはこの地が囿なのだろうと……………」

「

正宗は上空高くのいる信長の乗る戦闘機を見上げた。

その戦闘機には大量の荷がぶら下げられていた。

それはおそらく広範囲を一気に殲滅できるほどの強大な兵器。

そして伊達の軍勢に逃走も許さず、空から織田信長による攻撃は  
行われた。

落とされたものは、大量の焼夷弾。

あたりは一気に火の海となり、伊達の軍勢を焼き尽くした。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6035g/>

---

ハイテク無双！ 戦国の勇者たち

2010年10月14日16時41分発行